自由学校 遊（ユウ）

2020
6月

ゆうひろば

zoom を使ってのレクチャー風景
（2020 年 5 月 15 日「遊」事務所にて、木田ひとみさん）

特集　コロナ禍からみえてくるもの

ダイヤモンド・プリンセス号 ・・・ 2
コロナウィルス問題に思う ・・・ 4
覚えておこう－「コロナ危機」に際して ・・・ 6
大丸派遣切り　怒りの抗議行動 ・・・ 7
脅かされ続ける市民社会スペース ・・・ 8
新型コロナウィルス感染症と「遊」の対応 ・・・ 9
世界に誇っていいミニシアター文化 ・・・ 10
「当たり前」が当たり前にできないこと ・・・ 11
コロナと日々の暮らし ・・・ 12

講座報告　自主講座“「老いと向き合う」茶話会” ・・・・ 13
つんどく屋　写真集『NEW CITY』 ・・・・ 14
つんどく屋　『生と死を見晴るかす橋の上で』 ・・・・ 15
連載　「生きる場の思想と詩」日々 抜粋（第2回） ・・・・ 16
連載　フィールドワークな日々（第 82 回） ・・・・ 17
連載　きままに俳句（第 24 回） ・・・・ 18
事務局便り　ほか ・・・・ 19

遊通信
第 175 号

特集　コロナ禍から見えてくるもの

コロナ禍は私たちの生活を大きく変えました。特に生活弱者に対する影響は大きかったと言えます。私たちは今、見たことのない相手への対応の難しさ・怖さを味わっています。同時に、コロナ禍はいろいろな隠し事を暴いてくれました。政府と東京都のオリンピック優先・国民（都民）不在の姿勢や、途方もない国費の無駄使いなどが露見しました。そんな中で、「火事場泥棒」の黒川問題をtwitterデモで叩いた民意の力は、最近にない快挙で、新鮮でした。また、我々が気付いていなかったことを明らかにしてくれました。今回のコロナウィルスは野生動物から家畜そして人間に感染しているとのことですが、人間と野生動物のあるべき距離感を開発行為で壊しているのは人間で、その背景に経済優先主義があることを知らせてくれました。ポストコロナが議論されていますが、人間は生態系の一生物に過ぎないことを自覚した上で、他の生物と共生する道を探すしかないのでしょう。

ダイヤモンドプリンセス号乗船から見えてきたもの

千田 忠

1月19日、私は14日にわたるダイヤモンド・プリンセス船内（以下DPと略記）での「隔離」から解放されて横浜港に下り立った。1月20日に乗船し、鹿児島、香港、ベトナム、台湾、沖縄を経て2月4日には帰札する予定であった。

この間のいきさつについては、4月13日に「遊」の学習会で報告した。

以下では、「DP乗船」から見えたものについて焦点をしぼって述べたい。

1　「豪華」客船の虚飾と実像

現在のクルーズ船は、1970年代に誕生して以来、「規模の利益」（スケール・メリット）を求めて、年々巨大化してきた。今では乗客だけで4000人～6000人以上を収容できるメガ客船が主流になっている。利用者数という点でも、世界全体では2600万人（2018年）を超えて、欧米ではもはやだれもが楽しめる「大衆客船」となっているのである。

クルーズ文化が先行した欧米に比べ、日本ではクルーズ船利用者は年間わずか20万人程度、ここ4年前ほどでやっと30万人台に達したに過ぎない。

日本では「豪華」客船という虚飾がふりまかれてきたが、船を常に満席にする手法として発達した「イールド戦略」（航空機の料金設定でよく知られている）によって、実際の価格帯は幅広い。近年では宿泊、食事などすべて含め1万円台という低料金帯のチケットが入手可能である。今回のDPの場合も、1日あたりが1万円台の前半の価格帯で乗船者が多数いた。「豪華」は乗客の「見栄」をくすぐる虚飾であり、料金実態をみれば「大衆客船」といえる。

2　選択と集中　巨大化の代償としての船内感染爆発の発生

収益を最大化するため、選択的に投資を集中する。巨大客船は新自由主義的な戦略の典型的な産物であると思われる。収益の極大化は船の収容数を巨大化することによって可能となる。「海に浮かぶ都市」「洋上のホテル」といわれる巨大で異様な外貌は、そうした戦略によってできあがったのである。

その結果、船は大量の廃棄物を出し、排気ガスを排出して地球環境を悪化させている。巨大化した船内は、感染症をもたらすウイルスにとって格好の住処になる。これまで繰り返し「ノロウイルス」などの船内感染爆発に襲われてきた。船側は、そうした事態に対して一定の対策基準を作り対処してきたとはいえ、それは「利益の極大化」という目的に適合する範囲内においてであった。

今回の新型コロナウイルスの船内爆発でも、船側は下船した乗客が感染していたことを2月1日付で香港から通報を受けたにもかかわらず「顧客からすでに料金をいただいている」ことを理由に、もっとも船客が賑わう「さよならパーティ」などを規制しようとせず、結果的に2月5日の早朝まで、みるべき対策がとられず、放置されたのである。このことが船内の感染爆発につながった可能性が大きい。

3　途上国の「低賃金労働力」への依存とサプライチェーンの脆弱さ

DP内での感染爆発があぶり出したのは、船を実質的に動かしているのはアジア人労働者の低賃金・長時間労働の問題であった。彼らは、長期にわたって故郷と家族のもとから離れ、非人間的な環境の下で働いている。とくにウエイター、清掃、室内サービスなど非熟練職種の大半が低賃金で無権利状態の下におかれている。彼らもまた感染し、大半は故郷に戻らざるを得なかった。

新型コロナの船内爆発が起こったのはDP号だけではない。世界的な規模で巨大客船内での感染爆発が発生し、現在でも多くは外港に停泊し、あるいは洋上をさまよっている。

船主側の国内感染状況が小康化あるいは縮小したとしても、途上国の感染爆発が続いている限り、船を動かす労働力の確保はできない。人材は途上国の労働者に依存しているのである。新型コロナの問題は、クルーズ業界が途上国による労働力供給という脆弱なサプライチェーンの上にかろうじて成り立っている実態をあらためて浮き彫りにしたのである。

「アジア人労働力」に依存して成り立ってきた巨大客船のマネージメント・モデルは、大きな岐路にさしかかっているといえる。

4　詳細な「検証」こそが求められる

横浜港での検疫では712名が感染者、約35名余の重症者（人工心肺使用、ICU収容者）、13名の死者が出た（6月3日現在　厚生労働省発表）。厚生労働省の現場での対応は、ことごとく「後手後手」であった。重症の症状を何度伝えても、医師が派遣されるまで数日にわたって放置される事態が続いた。万全の体制をとれば、死亡にいたる事例を少なくすることができた可能性がある。また、乗客に対する情報提供はきわめて不十分どころか、そもそも「リスクコミュニケーション」機能が存在しなかった。

菅官房長官や厚生労働省サイドは、これまでたびたび「事後の検証が必要だ」と公言している。しかし、現在までその気配は感じられない。

※「現地対策委員会」は5月1日付で「ダイヤモンド・プリンセス号現地対策本部報告書」（A4・7ページ）を発表した。しかし。事実経過をたんに羅列した文書に過ぎず、到底「検証」と言えるものではない。

千田忠（ちだただし）
ケアコミュ札幌代表、社会的ケア研究者、博士（北海道大学）。家族とたまたまダイヤモンドプリンセス号に乗り合わせ、「船内隔離者緊急ネットワーク」代表をつとめる。

特集

コロナウイルス問題に思う

西尾 正道

人類と病原菌との戦いは永遠のテーマである。がん患者さんの直接死因も2～3割は肺炎などの感染症である。がんが進行し免疫力も低下して細菌や真菌などによる感染症が命取りとなるのである。全ての命あるものは生き延びようとする。がん細胞も生き延びるために増殖しやすい部位へ浸潤し、抗癌剤で叩かれれば薬剤耐性を獲得して対応する。細菌も抗生物質に対して耐性をつくり、効果が薄れるために新たな抗生物質の開発が行われている。その中で、ウイルスは多くは動物と共存しているが、変異したりする過程で人間にも病原性を持つこととなる。ウイルスは生物の細胞内に入り複製し増殖するが、細胞はなく、代謝もないので生き物として扱うかどうかは生物の定義によるが、いずれにしても感染すれば病原性を持つ。本稿では紙面の都合で検査の問題を中心に論じる

ウイルスはDNA型とRNA型があるが、コロナウイルスはRNA型で1本鎖であるため容易に変異する。10年程前に流行した新型インフルエンザもRNA型であり、日本は約1万人が死亡したが、死亡者数は年々減少しているが、2018年は約3800人がインフルエンザで死亡している。

今回のコロナウイルスでも多くの変異が報告され、200種ほどの変異したウイルスが報告されている。このため諸国の死亡者数を比較すれば、単に医療体制の差だけではなく、ウイルスの変異による毒性の強弱が関係していると考えられる。少なくとも武漢や日本と欧米のウイルスは毒性が異なっているのである。またウイルスに対する人体の反応は人種や民族による遺伝子の違いもあり、死亡率に関与している可能性もある。

今回のWHOによるパンデミック宣言により、全世界が対応を迫られているが、日本の対応は少ない検査数で、3密を避ける対応に終始している。北海道の緊急事態宣言も裏で安倍首相と連絡を取り合い、全国への緊急事態宣言の予備試験として行われた。学校で一人も感染者が出ていないのに学校を休校にしたりして混乱を招いたのは為政者の責任であるが、その休校とする必要性を医学的に論じられることもなかった。

対策を行っているというポーズにごまかされ、①デタラメなお上にも従順な国民性と、②マスク文化と、③握手やハグする慣習も無く、④世界的に見れば最も衛生的な生活住環境にある日本が欧米に比べて感染者が比較的少ないという現状を生み出している。ただ感染者数に関しては検査を絞っているため全く当てにならないという問題もある。

ちなみに慶應義塾大学病院で4月13日から4月19日の期間に行われた術前および入院前のPCR検査において、新型コロナウイルス感染症以外の治療を目的とした無症状の患者さんのうち6％の陽性者（4人／67人中）が確認されているが、これは院外の市中で感染したものと考えられる。この確率を東京都の人口で考えれば、1395万人×6％＝83・7万人となる。

また医療従事者は感染のリスクが高く、同病院の初期臨床研修医99名に4月1日から順次PCR検査を行った結果、18名（18・2％）が陽性となっている。WHO事務局上級顧問の渋谷健司氏は『陽性は判明している人の10倍以上いる』と述べている。

武漢から帰国した男性に日本で初めてコロナが検出された1月16日から半年経つが、まだ充分な検査体制はできていない。また日本感染症学会は、陽性であれば軽症者でも入院させる必要があり、医療崩壊するので検査を制限する方向で間違った指針を示した。何とも国民の命を軽視した学会である。

国は習近平の国賓としての来日問題も絡んで中国への対応が遅れ、更に検査をしない姿勢はアベ政権と小池都知事が団子状態になってオリンピックの開催を最優先していたためである。〈女性自身〉2020年3月24・31日合併号で、『病院関係者が怒りの告発！「新型コロナ陽性判定が大量隠蔽されている！」「感染者数の数字操作の指令が！」』と政府が指揮してオリンピック開催に固執していた姿が報じられていた。

ローマ帝国の悪政を隠すために、円形闘技場（コロッセウム）を作った手法を真似て、安倍首相は自分の悪政・詭弁・虚言などに眼を向けさせないために（復興）オリンピックを誘致したのであるが、見識ある人間であれば、オリンピックに使う費用は福島県民に供給して復興を速めたであろう。

オリンピックの延期が決まり検査数が増えたが、まだ十分な検査ができていない。通常のインフルエンザは潜伏期間が短く2～3日で症状を呈するが、新型コロナウイルス感染の場合は約半数が無症状で、潜伏期が約2週間だとすれば、検査を絞ることは大間違いである。

歴史的には、1980年代に医療政策が変化し、結核などの感染症対策から生活習慣病対策へと変換した。この流れで1994年には保健所法が廃止され、「地域保健法」となり、保健所と人員の削減が行われた。全国の保健所数は1989年（H元年）には848カ所であったが、2018年（H30年）には469カ所（55％）に減少し、保健師数も激減した。こうしたマンパワーでは到底パンデミックの対応はできないのであるが、国立感染症研究所が研究事業として仕切るために行政検査とし、データを独占するために民間に検査をさせなかった。

PCR検査は全国の保健所や衛生研究所だけでなく、民間の検査センター、医学部病院、歯学部、獣医学部、農学部などの大学でも検査は可能であり、こうした施設も上手に使えば、1日10万件のPCR検査は可能だったし、検査を自動化できる検査機器も販売されているのだ。医学が進歩した今日においても検査を絞り100年前のスペイン風邪の時代の対応をしている日本の馬鹿さ加減は目に余る。

世界中で人間の交流がある飛行機の時代では、第2波・第3波のパンデミックも起こりえる。その場合はウイルスの変異で毒性を強めより深刻な事態となるかもしれないので、生活習慣病だけでなく感染症対策を見直して検査や医療体制の構築が急がれる。

西尾 正道（にしおまさみち）
北海道がんセンター名誉院長

内科・神経内科
札幌中央
ファミリークリニック
外来一般診療
月火木金9:00～11:30
札幌市中央区南1条西11丁目
ワンズ南一条ビル6F
TEL. 272-3455

自然食ホロ
札幌市東区中沼西
5条2丁目3－16
TEL：887-6224
いつも喜んで、
感謝して。
http://holo.sunnyday.jp/

特集

覚えておこう――「コロナ危機」に際して

北村 公一

感染者は、いまだ収まってはいないが、人々の行き来が始まった。6月17日に第201回通常国会は閉会した。1月20日の施政方針演説では、今年開かれるはずだったオリパラのことを何度も高揚して話していた。その時、新型コロナ感染が拡大し、この国会がこういう形で終わるとは誰が予想したであろう。

「ショック・ドクトリン」という言葉がある。日本語訳は、「惨事便乗型資本主義」と言う。電通問題、GoToキャンペーン、9月入学など「コロナ危機」に際してそういうものも多々あった。それを「コロナショック・ドクトリン」と呼べないこともない。あわよくば変えたいのだ。

その関連として3点述べておきたい。

1．憲法に緊急事態明記は必要なのか？

2020年は、憲法改正により新たな年になるはずだった。しかし、今の憲法下で「緊急事態宣言」は十分出せる。13条の「公共の福祉」と25条の「社会保障」を根拠にできるので明記は必要ない。逆に政権がこだわるのは、「誰が出すのか」をはっきりさせたいがためで私たちにとって重要なのは、どのような緊急事態を出すかということである。

2．三権分立は機能しているか？

衆議院・参議院のHPでは、国民を真中にして三権に意見を言うことができる。国会（立法権）に対しては「選挙」、裁判所（司法権）に対しては「最高裁判所裁判官の国民審査」、内閣（行政権）に対しては「世論」。今回の「検察庁法改正案」が廃案になったのも世論の力と見ることができる。

しかし首相官邸HP（https://www.kantei.go.jp/jp/rekidai/1-2.html）では、行政は、国民に対して矢印があり、国民は行政に対して矢印がない。国民は従うばかりなのだろうか？

1959年の砂川事件最高裁判決。つい先日、統治行為論（高度な政治問題は司法は判断しない）について裁判官15名のうち賛成は7名だったことが報道でわかった。それを当時、多数意見として60年安保改定につなげていった。司法の判断・責任の回避は、現在まで続いている。

黒川問題に象徴されるように現在は、三権のうち内閣（行政府）に権力が集中していると言わざるを得ない。

3．イージス・アショアは何故停止になり、辺野古は何故工事が継続されるのか？

閉会2日前に停止が明らかとなり国会で審議もせず終了。記者会見の一方通行だった。どういうことがあり何を考えているのか。更に敵基地攻撃能力の保有について検討する考えを明らかにした。停止の代わりに集団的自衛権を一歩進めたいのか。費用のことを問題にするなら辺野古基地も莫大なお金と時間がかかるはず。いずれにせよ私たちには、知る権利がある。

「コロナ危機」は、私たちに様々な問いを突き付けてきた。どれも本質的な問題だった。

パレスチナ出身のエドワード・サイードは、「新しいという形容詞には、気をつけなければならない。」と警鐘を鳴らした。この半年自分が何を考え、何をしたか、何を決意したか忘れずに覚えておこうと思う。

北村 公一（きたむら　きみかず）
元小学校教員

特集

大丸派遣切り　怒りの抗議行動

桃井 希生

2020年5月30日土曜日、今年いちばんの日差しの中、大丸札幌店の正面玄関前で派遣切りに対する抗議行動を起こした。緊急事態宣言が解除され、営業再開してから初めての土曜日。大丸札幌店にとっては待ちに待った日。しかし、切り捨てられた従業員のことを忘れてもらうわけにはいかない。

北島夏美（仮名）さんは、中国語通訳を業務とする派遣社員として大丸札幌店資生堂の化粧品売り場で2年以上働いてきた。外国人観光客を相手に、繁忙期は1日150人を接客することもあった。派遣会社は大丸松坂屋グループ100％出資の株式会社ディンプル。しかしコロナ禍における百貨店の業績悪化を理由に、派遣社員の多くが解雇、北島さんも4月末での雇い止めを宣告された。雇い止めの予告はたった20日前だった。今回のコロナ禍で、国や道、経団連までが派遣の雇用を維持するように企業に要請している（本当は「要請」ではなくスペインのように法律で解雇禁止にすべきところだが）。そのための雇用調整助成金も拡充されているのだ。にもかかわらず、正社員の雇用を維持する一方で派遣社員は簡単に切り捨てられた。

今回の行動に備えてか閉鎖された大丸の正面玄関。そこにナショナルセンターの壁を越えた様々な組合旗がはためく。「大丸は派遣の使い捨てをやめろ」と書かれた「大丸カラー」の青緑地の看板。鈴木一副委員長は「派遣であるというだけで国のセーフティネットから外されるのはおかしい」と訴えた。道労連の三上友衛議長も「小さな居酒屋でも雇用を維持しているところもある。大企業の大丸は派遣であろうと雇用を維持し、社会的責任を果たしてほしい」と述べた。次いで労働弁護団の斎藤耕弁護士、市民団体の活動家、介護士、大学教員などのマイクリレーが行われた。締めは、この日集まった50人余の「大丸は派遣差別をするな！」「大丸は派遣の使い捨てをやめろ！」「大丸は加藤厚労大臣の言うことを聞け！」のシュプレヒコール。怒りの訴えは大丸の中にも届いただろうか。

明けて月曜日、立憲民主党の鉢呂吉雄参議院議員が組合事務所を訪れ、その翌日には派遣切りの調査をするように厚労省に働きかけた。それを受けて行われた6月8日の労働局職員による組合への調査では、派遣労働者に対する法的保護が弱すぎることを訴えた。同様の調査は相手の派遣会社である株式会社ディンプルにも行われたようだ。

今回の行動の場、大丸札幌店そしてJR札幌駅の前の小さな広場は札幌市の管轄だった。利用届さえ提出すれば大丸の目の前でいつでも何度でも抗議行動ができるのだ。今後は全国の大丸で不買運動を展開する。人間を平然と使い捨てにする企業には、労働組合がお仕置きだ！

桃井希生（ももいきお）
2020年4月から札幌地域労組で働く。2019年、寿郎社刊「北海道大学　もうひとつのキャンパスマップ」に共著で参加。

特集

脅かされ続ける市民社会スペース

堀内 葵

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID－19）の拡大防止策として、世界各国で「社会的距離政策」に基づくロックダウンが行われている。これは、罰則を伴う外出規制や長距離の移動制限、集会の禁止や参加人数の設定などの様々な制限が「市民社会スペース」に加えられていることを意味する。「市民社会スペース」とは、市民社会の自由な言論・活動のための社会空間である。COVID－19の拡大以前から、市民社会組織に対する法規制や権力の恣意的な行使、不公平な取り扱いや処分、不透明な手続きなどの形で「市民社会スペース」が狭められている状況が続いている。世界各国における市民的自由について調査し、提言活動を行っている国際NGOのCIVICUS（本部：南アフリカ共和国）は、COVID－19の拡大以降、各国でどのような制限が加えられたのかを調査した報告書『市民の自由とCOVID－19パンデミック　世界各地における制限と攻撃』（JANICなど3団体が翻訳）[*1]を発表した。同報告書によると、「市民社会スペース」の制限は、

1. 情報アクセスに関する不当な制限と検閲、
2. 重要な情報を発信した活動家の拘留、3. 人権擁護者や報道機関に対する取り締まり、
4. プライバシーへの権利の侵害と過度に広範な緊急事態権限、の四つに大きく分類できる。例えば、エルサルバドルでは、危機と政府の対応に関する記者会見の場でジャーナリストが質問をすることは許されていない。スリランカでは、公務員を批判する投稿をソーシャルメディア上で公開した者に対して法的措置を採る指示が全ての警察官に対してなされ、ケニアでは各地の警察が夜間外出禁止令を無視した人々に暴力をふるう様子が記録されていた。

これらの規制や暴力による市民の弾圧は、COVID－19を契機として発生したものではなく、すでに狭められつつある「市民社会スペース」を、意識的にせよ無意識的にせよ、より一層縮小させるために政府側が行っている「施策」の一部なのである。CIVICUSは、基本的な自由がウイルスの犠牲にならないよう、表現の自由を保護し、メディアの検閲を控えること、どのような制限も正当な手続きと合法性・必要性・正当性があり、国際的な法律や基準に沿ったものとしなければならないこと、などの9項目を提言している。

「市民社会スペース」に関する動きとして、毎年開催されるG20サミットに向けて市民社会が提言を行う仕組みである「C20（Civil Society 20）」による政策提言書を紹介したい。6月2日に公開された「C20政策提言書2020」では、G20サミットで議論される貿易や気候変動、国際保健、インフラなどの分野に関する市民社会からの提言に加え、「市民社会スペース」や「反腐敗」に関する章も設けられている。ロックダウンの影響でデモが開催できず、オンラインでのキャンペーンに移行していることや、外出規制が続くことからNGOとして現場での活動ができなくなっていたり、活動資金を獲得しづらくなったりするという状況が紹介され、「市民社会スペース」を守るためにG20各国は活動家やジャーナリストの人権を保護すべきである、と提言している。また、「反腐敗」の章では、医療システムへの巨額な資金投入についてはアカウンタビリティと公平性の観点から検証が必要であることや、人権擁護者や内部告発者を守ることは民主的で説明責任の果たされる社会の構築に不可欠である、と指摘している。

日本においては、「自粛警察」と呼ばれる監視活動や、感染者やその家族に対する誹謗中傷、営業中の店舗への嫌がらせなどが発生しており、政府だけでなく、市民自身が「市民社会スペース」を狭めるという悲しい現実がある。3月27日にSDGs市民社会ネットワークが発表した声明文「今こそ、SDGsの理念に基づく対策を」[*2]では、SDG目標16に基づいて「透明性と公開性を担保し、民主主義と法的手続きを遵守した政策形成と対応」を呼び掛けている。感染症対策や社会的影響への対処には、基本的人権の保障が必要不可欠であり、それは「市民社会スペース」の確保にもつながると言える。

＊1　JANICウェブサイトより閲覧可 https://www.janic.org/blog/2020/05/22/civicus_monitor_covid-19/

＊2　SDGs市民社会ネットワークウェブサイトより閲覧可　https://www.sdgs-japan.net/

堀内 葵（ほりうち あおい）
特定非営利活動法人国際協力NGOセンター（JANIC）アドボカシー・コーディネーター。市民社会スペースNGOアクションネットワーク（NANC-iS）世話人。

＜事務局便り・番外編＞ 新型コロナウィルス感染症と「遊」の対応

「遊」では新年度講座が本格的に始まる前の４月 20 日に緊急理事会をオンラインで開き、前期講座の教室実施を一旦すべて中止とする方針を固めました。

予定されていた講座は、担当者や講師の意向も踏まえ、①オンラインで開催、②当面延期、③後期に延期、のいずれかとしました。この判断の背景には、zoom 等の使用によりオンラインでの講座開催の見通しが立ったことがあります。講座の性格や対象、講師の意向などもあり、すべての講座をオンラインに切り替えたわけではありませんが、全部で９つの連続講座（と１つの研究会）をオンラインで実施しています。そのうち、毎回参加者を募る形の７つの講座については、無料での開催に踏み切りました。zoom は初めてという人も当然多く、つながらない、音が聞こえない、声が出ない…など、トラブルもないわけではありませんが、全体としては順調にできていると思います。

オンライン講座を実際にやってみて感じることは、当たり前ですが、オンラインは教室とは別のものだということ。教室をそのまま「再現」はできないけれども、オンラインならではの良さもあります。最大の利点は「場所を選ばない」こと。オンラインでは道外の参加者も多く、中には海外からの参加もあります。道内であっても、札幌の街中まで出てくるのは困難という方は多いと思いますが、オンラインであれば容易に参加可能です。無料にしたこともありますが、どの講座も教室に集まったであろう人数よりも多くの参加があります。

とはいえ、オンラインですべてが事足りるとは思えません。市民活動のベースは何といっても、人が集まって話しあい、学びあうこと。「遊」はそれ自体がメインの活動なので、教室での講座再開を目指していますし、一部の講座は７月以降再開します。

もっとも、「遊」の講座は前期・後期で組み立てているため、教室開催講座の多くは後期（10 月）からの開催となります。対面での講座再開を心待ちにしている皆さんには申し訳ありませんが、事務局としては、今回の事態を一旦立ち止まって今後についてじっくりと考える機会と前向きにとらえたいと思っています。「遊」は今年、設立 30 周年を迎えています。30 年間、走り続けてきた「遊」ですが、これからの時代に向けて「遊」の果たすべき役割は何なのか、コロナ禍で浮き彫りになった諸問題にどう立ち向かっていくのか、長いスパンで考えたい。講座はやっていなくても、事務所は基本開いていますので、皆さんどうぞお気軽にお立ち寄りください。

（小泉 雅弘／さっぽろ自由学校「遊」事務局長）

特集

世界に誇っていいミニシアター文化

中島 洋

1992年に市民出資のミニシアターとして「シアターキノ」を設立して28年、42日間もの休館が起きようとは。パンデミックを描いたSF映画は数多いが、予想だにできなかった。日常生活が静かな不安で脅かされていくこの体験は、ポストコロナを新しい芸術表現がきっと描くことになるだろうからここでは語らないが、中島岳志さんが指摘したように、地球環境の破壊がもたらしたことには間違いないだろう。新型コロナがワクチンなどによって防止できたとしても次のウィルスがまたやってくることは多くの専門家が指摘していることだ。地球は滅びないだろうが、人間という種は滅びる可能性を本気で考えもする。

さて、休館を決意する少し前、深田監督たちが発起人になって全国のミニシアターを救えと、ミニシアターエイドを立ち上げてくれた。本当にありがたかった。

ヨーロッパの多くのミニシアター（例えばドイツではキノコミュナール）は、国、州、市町村の3つから助成を受けて、シアターキノが上映しているような商業的アートフィルムや、国の文化的財産である過去の名作や、監督たちを招く企画特集などで運営している。それは映画に限らず文化で最も大切なのは多様性という根本的な考えがあるからで、経済原理だけで作品選択はしない。日本が文化を大切に考えていないことは、今回の政府対策でまた明らかになったことだが、逆に民間の力をこんなに強く感じたことはない。先述のヨーロッパの例とは逆に、日本のミニシアターは公的支援はほとんどなく、シアターキノの市民出資や、個人が借金をしたり退職金を全部つぎ込んだり、数年かけて市民運動をおこし5000人の市民の寄付を集めたりなど、本当に多様な知恵と工夫で設立していて、実は世界でも稀なミニシアター大国なのだ。今回のミニシアターエイドは、世界に誇るべき日本のミニシアター文化を、自分の好きな映画館を救えではなく、全国のミニシアターを一館たりとも閉館させてはならないという、文化の市民運動だったと思っている。最終的に約3万人弱から3億3千万という信じられない額が集まった。クラウドファンディングでも歴史的事件だ。

キノにも分配としてまもなく320万が送金される。この他あらゆる助成金にも申請し、休館中もかかる一月約380万の最低経費をなんとかクリアして再開にこぎつけたが、お金だけでなく全国でこのような支えがあることの精神面が本当に大きかった。最後に静岡県のある観客の言葉を。「日本中の、世界中の全ての映画館が一刻も早く再開することを祈りながら、ぼくはまた映画館に行く。映画館を支えるためなどではない。支えられているのはぼくなのだ。」

中島 洋（なかじま よう）
シアターキノ代表。映像作家、美術家としてのアートプロジェクト「記憶のミライ」が7／11（土）～20（月）市民交流プラザ2階スタジオで開催。

生活クラブは、
ちょっと変わった
生協です♪
モットーは
「おいしくてカラダによくて
自然を壊さない」です
生活クラブ北海道　検索

特集

「当たり前」が当たり前にできないこと

月

新型コロナウイルスの影響は私たち医療学生にとって大きな影響を及ぼしています。本来であれば、この時期は病院で4カ月間の実習を行っているはずでした。臨床実習の経験は、秋から始まる就職活動や2月末に待ち受けている国家試験に大変重要なものとなります。このパンデミックの状況下で、病院実習を行えるはずもなく学内での実習という形になりました。さらに、登校禁止という条件で、オンライン上実習という異例の事態です。学生の戸惑いも多い中、先生方はあらゆる手を尽くし臨床実習に近い状態の課題を出してくださいました。自宅で一人、PCと教科書、参考資料とにらめっこしながら毎日が過ぎていきます。楽をしようと思えばできてしまう環境で自分を律しながら毎日課題をこなしていきます。患者さんが目の前にいるわけではないので、紙面の情報から最大限想像力を働かせなければいけません。そこに存在しない人の治療をしなければならないのですから、この作業が結構大変で、苦労しています。

今一番困っているのは、友達と遊べないとか、飲みに行くお金がないとかそういうことではなくて、将来への不安です。就職後、臨床実習の経験がないからねとかレッテルを張られるのではないか、そもそも、どこに就職したらいいのかわからないという不安を私たち医療学生は抱えているのです。しかし、だからと言ってそれを言い訳にしたくはありません。自分なりに将来の構想を考えています。自分のやりたいこと、将来の目標がこのパンデミックの時期いわゆる「おうち時間」を通して自分と最大限に向き合い、決まったのです。

ですから、新型コロナウイルスは全てが悪影響ではありませんでした。私の中で、感謝と憎しみの相反する感情が生まれました。今は我慢の時だと感じています。国や世間に言いたいことはたくさんありますが、世界的に大変な時期ですから、一人一人がわがままを言っていたら、本当に困っている人がそんな声にカモフラージュされて埋もれてしまいます。

限られた条件下で、工夫すればできることもあります。やはりここで重要になるのが、自律するということだと思います。そして、思考を止めないこと。コロナだからしょうがないと思い込んでしまっては、自分が怠けてしまうし、いざ社会に出たときに困るのは自分です。ゆとり世代ならぬ、コロナ世代だからって言われないように自分を律して毎日を過ごしていきたいと思います。

最後に、今回の新型コロナウイルス騒動で私が一番感じていることを率直に綴らせていただきます。人は人との繋がりが本当に大切だということです。ですから、家族、友達、恋人…自分の大切な人に日頃から感謝を伝えていくこと。そして、一番何より大切なのは「自分」です。自分を愛して認めること。「今日もよく頑張った」と自分を褒めること。これ以上の幸せがありましょうか？

月（つき／ペンネーム）
医療系大学の４年生

特集

コロナと日々の暮らし

細谷 洋子

自粛、禁止、同調圧力・・・

朝日新聞の投書欄に、誰もいない公園で父親が子どもを遊ばせていたら、警察に通報されて警官に職務質問をされたという投書が載っていて目を疑った。休業しない焼き鳥屋の看板にひどい落書きがされていたとか、中学生が公園でランニングしていたら、高齢者に「家にいろ！」と怒鳴りつけられたとか…。

全国で緊急事態宣言が発令され、自粛要請が長引くに伴って「コロナ自警団」「自粛警察」と呼ばれる存在を耳にするようになってきた。自粛に従わない人や休業しない店舗などを責める風潮と、それを言葉や行動にあらわす人たちのことらしい。「自粛要請」と「禁止」を混同しており、冒頭の警察への通報とか、店舗の看板への落書きなどは、こうした混同によって引き起こされていると思われる。

そして、怖いのは、こうした行動をする人たちは正しいことをしている、自分こそは正義だと思っているらしいことだ。そこには、正義とは何か、誰にとっての正義なのか、正義は一つなのか…などの視点はないし、相手に対する想像力もない。正義感や同調圧力の暴走というほかない。

子どもの公園遊びを通報された投稿者は、営業しているパチンコ屋を通報してやろうかと思ったが、それでは通報者と同じ土俵に乗ってしまうと、思い直したと書いていた。思考停止が事態をエスカレートさせ、他者への想像力も共感力も失ってしまう、そしてそれはお互いを追い詰めることにしかならない。

誰かと語り合いたい

自粛を振りかざす人たちは、しばしば命に関わる問題なのだから従うべきだという言い方をする。しかし、命に関わるのはウィルス感染だけではないだろう。休業や営業時間短縮による経済的な逼迫が命に関わることもある。家が安全な場所ではない子どもだっている。行動を制限されることによって、うつ病や認知症が悪化する場合もある。日々の暮らしには、それぞれに事情があり、一概にこうすべきだと言えるものではない。時にリスク判断の甘さや軽率さがあったとしても、暮らしとはそういうものなのだと思う。

新型コロナウィルスの感染がある程度収まった時に、感染はしなかったけれど、脚が衰えて歩けなくなったり、ストレスで体調を崩したりしたら、あほみたいだよねと、娘と電話で話したりした。精神的なストレスや体調管理、自分にとって何が大切かを考えながら、リスクを判断し、選択をする。その選択に至る迷いや悩みを誰かと語り合いたい。ちょっと背中を押して欲しかったりもする。何より、人と話すことそのものがストレスの軽減になる。

ステイホーム、不要不急というスローガンに過度に振り回されず、思考停止に陥らないためには、他者と語り合うことが必要ではないだろうか。電話やメールだけではなく、節度を保ちつつ、顔を合わせて語り合う場も持ちたい。

繰り返しになるが、それが暮らしであり、生きることだと、改めて思っている。

細谷　洋子（ほそや ようこ）
さっぽろ自由学校「遊」理事

講座報告

コロナに抗して集まって
―自主講座 "「老いと向き合う」茶話会" 報告

雨宮 恭子

新型コロナウィルスの威力は大きく、国中に非常事態宣言が発せられ、遊の講座も止まった。では、こもってだけいればいいのか。そうでもないだろう。なんとか規制をかいくぐりアメーバー的に集まりたいものだ。幸い、「老いと向き合う」のPART1からの参加者で自宅を改装して喫茶店を開いているAさんにお願いして場所を確保。コロナの感染予防対策をしつつ、茶話会をすることになった。日程は講座の第1回を行うはずだった6月5日（金）、場所はAさんのお店、先着10名程度で行うことにした。スタッフを入れて全部で7名程の申し込みがあった。

茶話会当日。まずは簡単に自己紹介をしてから本題に入った。コロナの話から…。「わたしたちは、もっと怒っていいのではないか。国がどれだけ国民一人一人を大事にしていないかを…。文化的なものを大切にしないことにも腹が立つ。」「なぜ、こんなに規制するのかわからない。」「経費削減で医療がとても脆弱になってしまっているのを強く感じた。」等辛口の意見交流がなされた。学校が早くから一斉休校になったことについても、本当に良かったのだろうかという疑問の声が出された。内閣総理大臣の号令一下休みにできるのは学校しかないので「国は対策をしっかりやってますよ」という実績作りにしたのではないかという意見もあった。一人一人の思いが率直に語られ良かったと思う。

最後に、今年度の「老いと向き合う」について、各担当者からの紹介をしてもらった。当初予定していた、オリエンテーションもなくなったので、今年度の前期の講座をイメージできてよかった。

最後に今後の方向を話した。みなさん、茶話会を継続したいとのことで、月1回行うことにした。自分にとって魅力あるものでないと、参加する気にならないという声があり、内容についての希望も取った。コロナによってどんな影響を受けているのか、実際に経験した人の生の声が聴きたいという要望が出た。

茶話会をやってみて、やはり直接会って交流するのは違うなあと感じた。終わった後、Bさんが、「コロナで今まで通りの生活ができなくなって、認知症になりかけいる友人がいてとてもショックなの。」と話してくれた。

非常事態宣言も解除され、「遊」の講座も当面延期となっているものが、各講座の判断で再開の検討に入ることとなった。そうなれば茶話会は自然消滅となる。でも、思う。「遊」の講座は私たちが元気に生きるために必要な物だから行われてきたのだと…。講座ができなくなった時、茶話会という形で集まれたことはよかった。生きていくために互いに支え合い学び合う場「遊」をこれからも大切にしていきたい。

雨宮 恭子（あまみや きょうこ）
さっぽろ自由学校「遊」理事。今期は「老いと向き合うPART3」「遊版うたごえ喫茶2020」「アイヌ民族くらしとことば」を企画運営。

オーガニック・自然食品専門店
らるばた
おべんとうとおそうざい
らるごはん
札幌市中央区大通西23丁目
Tel 614-2406 Fax 614-3836
http://rarubatake.com
10時～19時(日～17時・祝～18時)

明日はつんどく屋で買ってほしい・・・

写真集『NEW CITY』児玉浩宣

（フルカラー・98頁、2000円）

「香港の最後の自由だぞ！はやく来たほうがいい！」2019年6月。香港の友人から突然、連絡がきた。何のことかわからなかったが気迫に押されるまま、急かされるまま、その日のうちにチケットを買って、東京から現地に向かった。そこで見た光景は、これまで何度も通って慣れ親しんだ「香港の街」とは全く違っていた。

太陽に焼けたアスファルトの路上に集まった幾万の市民は、逃亡犯条例改正の反対を叫んでいる。しかし、集まった理由はそれだけでないことは叫ぶ者たちの顔を見ればすぐにわかった。これは自由のための戦いなんだ。

参加する若者の一人が言った。

「今、俺たちがこの町の歴史を作っている」

それから、私は取り憑つかれたように毎月、香港へと通うことになった。

数日前から撮影のために訪れていた香港理工大学が突然、武装した警察によって完全包囲された。その日の昼から翌日の未明までという長時間にわたり、警察の水砲車からの化学薬品入りの放水攻撃に遭い、学生たちは肉体的にも精神的にも疲れ果て、朦朧としていた。閑散とした食堂では非常ベルが鳴り響き、医務室では、学生たちが、怪我をした仲間の手当てをしている小さな声が漏れ聞こえた。バリケードの前で立ったまま眠る若者は、散発的な発砲音で目を覚まし、周りを見渡してはまた目を閉じた。

私が参加したデモの中は、ひとつの街のようだった。その街にはリーダーのような代表者がいない。この新しい街の住民は、それぞれが意志を持ち、各自行動する。当然、困っている人がいれば助けるし、いきなり路上で議論が始まったりもする。その街は、どこかを占拠し続けるようなかたちではなく、突然現れたり、忽然と消えたりもする街だ。そして、その街そのものが、彼らの理想とする社会を現わしているように思う。

毎日のように抗議活動をしながら移動する街は、理想とする社会を現実のものとするために、権力と戦う。その戦いの中に、私は自由を感じる。警察と衝突する者、平和的に訴える者、笑いを誘いながら抗議する者。誰もがお互いを認め合う。自由のための戦いなら、戦い方も自由でなければならない。

今回のデモは香港史上で最大規模の社会運動であり、あらゆる歴史が更新された。目に見えるもの、聞こえるもの、肌で感じるもの、全てが新しい。

日常生活を送りながら、残酷な現実に直面しながら、彼らは未来のために日々、戦う。

この街で、多くの市民が変化に気づき、意識を変えた。そして、それはもう後には戻れない。あらゆる意味で始まってしまったのだ。この戦いが続く限り、新しい街がここにあり、自由は確かにそこにある。

（リモート講座「香港と台湾」のゲスト・児玉さんの写真集「NEW　CITY」後書きから）

児玉浩宣（こだまひろのり）
一九八三年生まれ。報道カメラマンとしてテレビ朝日・NHKを経て現在フリーランスとして活動

明日はつんどく屋で買ってほしい・・・

『生と死を見晴るかす橋の上で』

花崎皋平著（私家版・159頁、1000円）

花崎さんにとって10冊目の詩集。「88歳。人生の終末期」（あとがきから）の刊行である。それにしても、なんと若々しい、気力に満ちた作品が並ぶのだろう。

「サケは故郷の川をのぼり／浅瀬で　雄が雌を追う／雄が口を大きく開け、ああと叫んで射精し／メスは卵を産み／ともにいのちを終える」（第2連）「生涯を賭けた　その人だけとの交わりは／そのつど一度限り／晩秋星がかたずを呑んで見つめ／コオロギやフクロウがひっそり鳴いて」（第7連）「古代からくりかえされてきた営みに溺れていると／死神が窓から　のぞき込んでくる」（最終連）

第1章の冒頭を飾る「エロスとタナトス」からの引用である。思い描かれる情景、臆することのない言葉遣い、スケールの大きな発想…まもなく「卒寿」を迎える人の詩だろうか。身体は相応に年を取っても、精神、気力とも一向に衰えていない、と誇っているようではないか。

詩は発表された途端、作り手から離れ、読み手のモノになる、という。読み手は作品を感じるままに、自由に解釈してよい、というわけだ。しかし、作品が詩人の生きざまから編まれた以上、それをまったく離れて読むことは難しい。

今回の詩集で、花崎さんはこれまで以上に「自分」を語っている。「年代記」と括った第2章では、軍国少年だったこと、漢詩の翻訳家だった母のこと、共産党に在籍した青年期、北大に赴任しその後辞めたいきさつ、娘二人を残して家庭を出たこと、伊達火発反対運動とアイヌの人々との出会い…淡々とした語り口に、より深い〝覚悟〟を感じる。

花崎さんはこの詩集で人生の来し方を振り返り、先に逝った友人らのいる世界に向かう自分を見詰めている。それは一歩ずつ登った山の稜線から来た道を振り返り、背景の山々を遠望し、さらに目指す山頂に至る道を視野に捉えるようである。

そして、もう一つのメッセージを感じる。「音楽や絵画は　永遠をゆびさす／詩の言葉は流れに浮き沈む　木の葉／吹きすぎる風の音／むなしさをかこちながら／言葉をすくい上げ　日に当てる」（第3章にある「音楽と絵と詩」の第4連）。この章では詩人の感性のあり方を示す。

「生」と「死」を結ぶ橋の上から見晴るかす双方の世界は、今やとてもクリアである。感じること（詩）、考えること（哲学）を一体とし、まっすぐに生きようとしたことを、自ら、いとおしんでいるように感じた。

私家版　頒価1000円。問い合わせは「遊」事務局へ。

（フリーライター　山本伸夫）

◇　◇　◇

「遊」で現在開いている「花さんの読書ゼミ」は、「詩の世界―茨木のり子と石垣りん」がテーマ。二人の詩を朗読しつつ、参加者同士で感想を話し合っています。当面、「ZOOM」による会議方式での実施です。

「生きる場の思想と詩」　日々　抜粋2　花崎　皋平

第一章の2

一九五〇年

六月二五日　朝鮮戦争勃発。北朝鮮側の侵入という報道を信じ、幻滅を覚える。この夏、大学から赤い教授を追放せよという勧告（イールズ声明）に対する反対が大学内に高まる。その勧告には断固反対だが、東大教養学部自治会のそれに反対する試験ボイコット・ストライキという手段は適切ではないと考えてボイコットには参加せず、一部の試験を受けた。このスト破りの直後から政治情勢についての無知、無関心だったことへの強い反省が生じ、政治・社会問題への関心と学習を強めるきっかけとなった。

アメリカに対し、警察予備隊二〇万の増加を要請し、軍需生産の一部を負担して、失業対策にあてようという論が新聞に載ったりしていて、共産党員になること以外に具体的な抵抗の不可能な時代がやって来る、という危機意識が生じていた。

一九五一年

一月二五日　作家宮本百合子の葬儀に、全学連の学生として学友とともに参列して詩を作る。詩集「明日の方へ」に掲載したものをのちに推敲した。

速鳥

〈からぬをしほにやき　しがあまりことにつくり
かきひくや　ゆらのとの　となかのいくりに
ふれたつ　なづのきの　さや　さや〉古事記
下巻

今　倒れて行く高い樹よ
おまえ　幾度となく「冬を越す蕾」をはぐくみ育
てきたものよ
もうすぐやってくる春を前に
咲ききれぬ沢山の蕾を抱いて　なぜおまえは倒れ
ねばならなかったか

この樹の影は　朝に夕に　島影をあわせ
ごうごうたる風雨に耐えて　ふかくくいこむ根元
から
常緑の甍を葺き上げてきた幹まで　抱きかかえて
いた

日の照る丘に　月のない夜道に
この上ない目印だったお前の姿よ
霜どけの地面に　枝をふるわせ
集まった多くの人たちの上へ　静かに
朝露を降り注ぎながら横たわった

若い樹々が庭を埋めて立っていた
樫や樅や櫟　杉もあったろう　その間を
夜更けや炎天　黒い氷の暁を
葉を振り落としながら耐えていた一際太く高い樹
が

音もなく　横切った

風はさやさやとは歌わなかった
ああ　かつて風は葉末をなぶり　蜻蛉を浮かべ
雲は手をつなぎ　心ゆくまで輝き
この美しい樹と妍を競っただろうに

大きな樹が倒れた
この樹を船に作ろう
昔の人に倣って　早い鳥のような船に
船は天に続く銀河を分けて進むためだ

この樹で　塩を焼こう　琴を作ろう
地の塩を　七里にきこえる琴を
多くの人にこの味を分かち
多くの人とこの音を聞くために

この船に乗って　奔騰する天への流れ
を
突っ切るために舵を握ろう
行手に向かって　告げ知らせよう
豊かな蕾を押しつぶし
ぎりぎりと鋸で引き続けたのは誰なの
か

大きな樹が倒れた　薄明にひびく
その重く　低い地鳴りよ
未知の海へ船出していった船の
とどめていったどよめき　明滅する
帆柱の赤いともしび

それを出発の合図とするために
ともしびよ
いつまでもやみにとどまれ

花崎 皋平（はなざき こうへい）
今年6月に89歳になる年寄りです。その生きてきた歩みの記録からの抜粋です。青年の頃から詩を書き続けてきているので、それも盛り込みます。

フィールドワークな日々　宮内泰介の

第八二回　近隣を歩く

四月から自宅勤務になり、授業も自宅からオンラインですることになった。家で仕事するのも、自宅からオンラインで授業するのも、やってみると悪くない。

しかし家にいると歩かなくなってしまうので、朝五千歩、夕方五千歩、合計一万歩のウォーキングをすることにした。

僕の家は札幌市の中央区と西区のちょうど境界にある。毎日少しずつルートを変えながら、このあたりを歩きつくすことになった。

歩いているといろいろなことに気がつく。たとえばところどころに大きな敷地の家があって、敷地内で畑をやっていたりもする。これは昔からの住民に違いない。そんな家がわずかだが残っている。

戦後すぐの航空写真を見ると、このあたりは一面畑だったことがわかる。住宅はぽつりぽつりとあるのみ。それが一九六五年の航空写真になると少しだけ住宅が増えはじめ、一九七六年の航空写真だと、もうびっしり住宅地になっている。畑は、札幌オリンピック前後に忽然と消えたのだ。（国が撮った昔の航空写真は、国土地理院のサイトにあります。同じものがスマホのアプリ「昔の航空写真地図」などでも見られます）

そのころ建てられたとおぼしき家やアパートもちらほら残っている一方、昭和の終わりごろに建てられたかなと思われる家、そしてごく最近建てられた家、と実に混在している。マンションも確実に増えている。歴史が何層にも何層にもなっている。

歩くといろいろなことが気になってくる。数は多くはないが、ところどころに空き家とおぼしき家がある。主がいなくなって、子どもたちが処分に困っているのかなあなどと勝手な想像をしてみたり。

歩くと少し調べたくもなってくる。

家の近くを流れる琴似川は、やはり戦後まもなくの航空写真と比べながら歩いてみると、場所によっては昔と変わっていない一方、場所によっては大きく流れが変わっている。面白いことに、うちの近くのいくらか直角に曲がっている不自然な流れの部分は、近年の改修工事かなと思っていたら、戦後すぐの時点ですでにそのような流路だったことが航空写真からわかった。

ある日は、ひょんな思いつきで、表札を調べてみようと考えた。最近増えているローマ字表記の表札。しかし、どのくらいの家がローマ字の表札を掲げているのか。スマホのカウンター・アプリを使って歩きながら二百軒ほどの記録をつけてみた。まあ、遊び半分だ。結果は、ローマ字表記のみの表札が一二%、漢字の姓とローマ字の姓を併記している表札が二〇%だった。

結果はそんなに重要ではない。歩いて、マチが少し、いとおしくなる。それが僕にとっては大事だった。

宮内 泰介（みやうち たいすけ）
一九六一年生まれ。さっぽろ自由学校「遊」共同代表。北海道大学教員（環境社会学）。ソロモン諸島、北海道、宮城などで、環境、生活の調査中。

さまざまに俳句

～五・七・五の言葉の出会い～

第24回

世界最短の定型詩と言われる俳句。五・七・五で作られる世界。日常、見たり聞いたり感じたことを、忙しい日々に忘れてしまうその一瞬を、十七文字に込めてみました。

菜の花の畑に似合う青い空

ある時偶然見つけた菜の花畑。鮮やかな黄色一面の花畑に感動し、初夏になると、いつ咲くのかとワクワクする。自粛生活で遠出もしないでいたけれど、そろそろ少しだけならと、菜の花畑に向かった。国道から少し入ったところに広がる菜の花畑。車から降りたとたん、甘い香りがした。その日は青い空が広がっていて、菜の花の黄色と澄んだ青い空のコントラストも、空に伸びていくその姿もとても美しい。人々の生活は変化し、思うように活動できないけれど、植物は変わらず時期になると花を咲かせることにほっとした。来年はもっと明るい気持ちで、菜の花畑を見に来たいな。

柚原誓子（ゆはらせいこ）
平日は会社員。休日は心惹かれるままに、趣味のスキー、温泉、旅行を楽しんでいます。数年前から始めた俳句。あらためて日本語の美しさに触れています。

花柄と色鮮やかな衣替え

夏服は花柄や鮮やかな色の服が多い。今年は暖かくなるのが早かったので、早々と夏服を出した。いつも夏はあっという間に終わってしまうので、お気に入りの服を着る機会が少ないと感じてしまう。今年の夏は自粛の中でも、やっぱり夏を楽しみたい。お気に入りの服を着て。

事務局だより

今年、傘寿を迎える小島喜久夫さんは、実名で旧優生保護法による強制不妊手術をされたことを違憲と訴え、裁判は2年を超えた。6月19日にコロナで3か月延期になっていた8回目の裁判で、本人尋問があった。先駆けて仙台で提訴した方の判決は、旧法の違憲性を認めた上で除斥期間（事件から20年で訴える権利、消滅）で敗訴。しかし、小島さんは、仙台の提訴を新聞で見るまで、優生保護法を知らなかった。「自分の人生は情けなく、不幸だと思わされてきた」50年を超えたその重さが、逆に除斥期間で壁になるとは、あまりに理不尽だ。

北海道ではもう一組、高齢のご夫婦が匿名で提訴されているのだが、女性の方の体調が優れず、証言は病床での聞き取りで行われ、不妊手術の実証のための検査も体への負担が大きいためできないというせつない状況。時間がない。小島さんの法廷もコロナ対応で、傍聴席は、3分の1に減らされ、報告会会場も同様で、あふれて会場外で待機してくれた記者団のために、証言でお疲れだった小島さん、弁護団は2回、報告をされた。

コロナよ、大事な時間を奪わないで！

「国は、謝ってほしい。障害があろうがなかろうが、人間として平等に、みんな一生懸命生きてるんだから」と小島さんは語った。

※公正な判決を求める署名は9月15日まで。一筆でもご協力ください。集約先のさっぽろ自由学校「遊」に署名欄のある面だけFAXで送っていただいてもいいです。FAX 011・252・6751

（七尾寿子）

オンラインでの寄付・会費の入金サイト syncable を開設しました

現在、「遊」ではオンライン講座を開講中ですが、オンラインでの寄付や入会に対応するため、NPO の寄付サイト syncable に登録いたしました。以下のページより、クレジットカード（VISA、mastercard）による寄付のほか、年会費の入金も可能です。ご活用ください。

syncable さっぽろ自由学校「遊」のページ

https://syncable.biz/associate/sapporoyu/

※なお、前号で紹介いたしました paypal につきましては、寄付徴収ができないことが判明したため、ウェブサイトへの掲載をやめています。ご了承ください

編集後記

緊急事態宣言とやらが解けて、札幌の街中も以前のように人が増えた。だが、パンデミックは終わっていないし、日本でも事態は流動的だ。極端な制限もどうかと思うが、一斉に元に戻ってしまうのもなんだか気持ち悪い。違う世界を見出したい。（こ）

さっぽろ自由学校「遊」 からのお知らせ

2020 年度前期講座「老いと向き合う」Part 3 開講のご案内

コロナの流行で人と人が直接かかわりにくくなり、高齢者の間で認知症が進んだり、フレイルが進んだり、介護の現場が混乱したりと様々な問題が起きています。このような状況だからこそ、集まって語り合うことの大切さを感じます。「老いと向き合う Part 3」スタートさせます。共に語り合い学び合っていきましょう！

■全３回　7/3、8/7、9/4　金曜 13:00 ～ 15:00　※ 当初予定と時間帯が変更になっています。
■会　場　さっぽろ自由学校「遊」（愛生舘ビル５Ｆ　５０１Ａ会議室）
■定　員　１５名（事前申込制）　　■参加費　600 円／回

※コロナウィルス感染対策として定員を定めます。参加ご希望の方は「遊」事務局宛に事前申込ください。
※参加の際はマスクを持参・着用ください。体調がすぐれないときは参加をお控え下さい。

７月３日（金）　認知症と向き合う (2)

●話題提供　雨宮 恭子（あまみや きょうこ）　さっぽろ自由学校「遊」

明日は我が身の認知症。いたずらに恐れずどう共存して いくのか。自らの発症を公表した長谷川和夫さん（長谷川 スケール・デイサービス等を考案）の映像を見て話し合い ます。

８月７日（金）　病と向き合う (1)　病院との付き合い方

●話題提供　森脇 栄一（もりわき　えいいち）「遊」会員

過剰検査、薬の副作用、薬草／発酵食品による治療など、森脇栄一さんの経験談をもとに参加者で情報交換したいと 思います。

９月４日（金）　第４回 病と向き合う (2)　治すのは自分

●話題提供　若月 美緒子（わかつき みおこ）　コミカフェ加伊経営

「自分の体調は自分しかわからない！」と、医者に頼る だけではなく薬や治療法を自分で考えるようになった人は 多いのでは。そんな経験を交流しましょう。

ゆうひろば
発行：NPO 法人さっぽろ自由学校「遊」
〒 060-0061　札幌市中央区南１条西５丁目　愛生舘ビル５Ｆ 501
・郵便振替口座：　02780-5-47036（名義：自由学校「遊」）
・TEL:011-252-6752
・FAX:011-252-6751
・syu@sapporoyu.org
・http://www.sapporoyu.org